
生徒会庶務の俺が送る日常

扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会庶務の俺が送る日常

【Nコード】

N1651Z

【作者名】

扉。

【あらすじ】

高校1年の春。

校門前で突然、「私はお前に惚れた！！ 生徒会に入れ！！」と生徒会長に言われて、生徒会室に呼ばれることになった。

生徒会長は学園初の2学年生徒会長& amp; 女子学生とらしい。副会長は学園裏ランキングの堂々1位のお嬢様。

書記の子は毒舌美少女

会計の子は……引きこもり？

そして、一条 志希が送る、庶務の日常。

今日も傍若無人な生徒会の人達が今日も騒ぎ立てるっ！！
？

キャラ No1 5 (前書き)

一樣 生徒会のキャラ設定です。

変更する可能性もあるのでちよいちよい覗いてみてください。

12/08日 一条 志希イラスト

キャラ No15

いちじょう 志希

性別：男

年齢：15歳

誕生日：7/7日

髪の色：黒色で前髪で片目が隠れている

瞳の色：黒色

身長：170cm

服装：指定の制服ではなく、カーディガンで登校（校則には可）

泉ヶ丘学園 1-1組所属

出席番号1番

役職：庶務

概要

姉と妹が1人いる。

成績はいい方ではないが、ここ1では出来る人。
家事などは一通り出来る……らしい。

昔、道場に通っていたこともあって少し強い。

両親は世界旅行へ行ったきり帰ってこない。

今は学園近くの借家に暮らしている。

姉と妹は実家で暮らしている。

姉はもの凄くDSで妹はお兄ちゃんLove

?
てんのうじ
天王寺 遥 はるか

性別：女

年齢：16歳

誕生日：12/24日

髪の色：薄赤色髪のポニーテール

瞳の色：赤色

身長：170cm

服装：しつかりとした服装

泉ヶ丘学園 2 - 4組

役職：生徒会長

概要

学園初 2学年生徒会長& a m p・女子会長

見た目は美人だが、中身は雑で仕事はするが大体副会長にまかせつきり。

女の子が好きで、生徒会を自分のハーレムと言っている。

男で初めて1目惚れしたのが志希だった。

？
花園 はなぞの
冬華 とうか

性別：女

年齢：16歳

誕生日：2/9日

髪の色：アッシュブロンドのロング

瞳の色：琥珀色

身長：165cm

服装：ブレザーを肩まで降ろしている

泉ヶ丘学園 2・4組

役職：生徒会副会長

概要

実質的な生徒会長。

頭もよくいつも学年上位。

志希の姉のことを中学時代にとっても慕っていたらしくその際、志希の話聞き興味を持つ。

純粹でとても可愛らしく、学園裏ランキングで2年連続1位である。

？
桜澤 千夏

性別：女

年齢：15歳

誕生日：1/9日

髪の色：黒髪の前髪パツツンで短髪

瞳の色：黒色

身長：160cm

服装：どんな時でも長袖

泉ヶ丘学園：1 - 2組

役職：書記

概要

中学3年生の頃に学園からスカウトに来て生徒会書記となった。
見た目は可愛いが毒舌で特に志希にはヒドい。
男の人と関わることを嫌い、志希の加入を最後まで反対した。

ひめあき
姫秋 唯

性別：女

年齢：16歳

誕生日：5/3

髪の色：銀髪の腰まで下ろしている

瞳の色：銀色

身長：150cm

服装：基本的にパジャマ（上からブレザーを羽織っている）

泉ヶ丘学園：2 - 1組

役職：会計

概要

学園始まって以来の『天才』

気まぐれで月1度しかガッコに来ない。

いつもぬいぐるみを片手に持っている。

口数が多い方ではなく、男子生徒と話している所は誰も見たことがない。

1部では泉ヶ丘学園の7不思議として語られている。

キャラ No1 5 (後書き)

生徒会のメンバーのイラストを描いてくださる方
いらっしやいましたらメールで教えてください。

第1話 高校1年の春（前書き）

作者初 生徒会シリーズです。

温かい目でご覧ください。

第1話 高校1年の春

高校1年生

地元を離れ別の地で踏み出すいい機会となった。

俺のことをいつもからかっていた姉の元を離れようやく自由の身となった。

そして高校入学から丁度2週間が経ったある日。

俺の高校生活は180°反転しだす。

朝

いつものように眠い目を擦りながら学園まで登校をする。

泉ヶ丘学園

この街では有名な伝統校らしく。

つい去年、大幅にリフォームしたてらしい。

全校生徒数は約2000人。

広い校舎と大きいグラウンドが特徴的である。

そして、その高校へ通い始めて2週間目となり、そろそろクラスの人の名前も

覚えてきた頃。

「おう！ー！ 一条、おはよ
「神山か。おはようさん」

俺こと一条 志希はクラスメイトである神山 友春と通学途中に出
会った。

「珍しいな、お前がこんな時間にいるなんてよ」

「そうだな。今日は珍しく朝部活が無くてさ」

神山はそう言うと、笑った。

どうやら神山は運動部系の部活に入っているらしい。

俺も笑った。

それからしばらく談笑を続けていると校門が見えてくる。

校門をくぐって玄関へ差し掛かった時に俺はある人とすれ違った。

薄赤色のポニーテール

瞳は赤色で身長は俺と同じくらい。

どこことなく漂う俺らとは違う『匂い』がする気がした。

「なあ一条。あの人が知ってるか？」

「いや……知らないけど」

「本当か！？ あの人はこの学園で知らない人はいないってくらい
有名人だぞ」

「へえ〜 そうなんだ。俺、そういう事あんまり興味ねえからさ」

「そうか。なら教えてやるよ。あの人が、この学園の生徒会長 天王
寺 遥先輩だ」

天王寺 遥……名前からして人の上に立ちそうな予感しかしない。

まあ、俺には一生縁がないけどな。

「まあ、いいよ。行くうぜ」

「それも、そうだな。それにしてもこんな朝早くから見れて良かったぜ。早起きは3文の得だな」

「いや、お前はもつと速く学園に来てるから、遅起きは3文の得じやねえのか？」

「それもそうだな」

神山は玄関前で1人笑った。

すると、校門前に立っていた生徒会長はいきなり凄い形相でこちらに向かつてくる。

すると神山は慌てて髪を直し始めた。

「やべっ……寝癖とかついてない？」

「大丈夫だ。寝癖なんてねえよ。毎日、セットしてるくせに」

神山の髪はセットされ尽くしたと思われるほど決まっていた。

どんだけ時間費やしてんだ？

そんなことを心の中で思っていると案の定 俺達の前に生徒会長が立ち止まった。

「お前が、一条 志希だな!!」

「はい……………つて!?! 一条!?!」

「……………俺ですか?」

期待していた神山は想定外の事態に顔をキョトンとさせ俺は目を点にして

生徒会長を見つめた。

「うむ。お前は一条 志希であっているな?」

「え……まあ。いちよう」

「そうか。よかった……まだ2度しか見ていなかったので間違いか
と思ったが

本人でよかった……」

生徒会長はそういつて胸を降ろすと改まったような表情をして玄関

前　それも

生徒が朝1番来る時間帯に大声で叫んだ。

「私はお前に惚れた！！　生徒会に入るがいい！！」

………。

周りの人も驚きを隠せない。

そして1番驚いていたのは俺ではなく隣にいた神山だった。

『昼休み、生徒会室に來い！！』と、あの後告げられ生徒会長はそ
の場を去った。

生徒会長が去った事で再び登校を始める生徒達。

しばらく立ち止まったままの俺と神山は遅刻ギリギリまで玄関前に
立ち尽くしていた。

1-1組

それが俺と神山の在籍するクラスだ。

まだ名前もよく覚えていないクラスメイト達が俺ら……恐らく俺を見ている。

俺は緊迫した空気の中、窓側の席1番端 出席番号1番の席へと腰を降ろした。

ちなみに、神山は隣の席。

そして後ろの席が……

「なあなあ。イチちゃん、生徒会長に告られたって本当?」

「毎度、毎度言ってるけど、俺は一条だ。イチちゃん、じゃねえ」

「まあまあ、硬いことは気にせんでいいやん。気楽にいこや」

「き・ら・く・じゃねえよ!! なんだよこの空気は!」

「そりゃあ、あの完全無欠最強無敵の生徒会長さんに告られただけでも大ニュースなのに」

それが男って!! これはもうスクープ魂が騒ぎ立てるわ。取材させて!!」

「嫌だ!!」

「つれないなあー」

この関西弁少女は凍空 出雲。

関西出身ではないのに関西弁を使っている謎の少女であり、この学園唯一の校内新聞

通称 『泉ヶ丘新聞』という新聞を書いている新聞部に所属している情報屋である。

「ってか、なんでその情報知ってんだよ。あれか、お前が情報屋だからか?」

「なわけあるかいな。情報屋でなくてももう校内中に知れ渡ってるでえ。』あの生徒会長が新入生に告った』ってな!!」

「はあ……………嫌だ……………とにかく目立ちたくないをモットーに過ごそうとしていたのに……………」

「無理無理、イチちゃん カッコいいもんどうせ別の所で誰かに告られるでえ」

「自覚がねえから目立ちたくねえんだよ。それにカッコいいならこの寝込んでいる神山くんがいるじゃないですか？」

「ん？ カミちゃん？ カミちゃんはカッコいいけど……………あれなんよ。

カミちゃんは不良系のカッコいいでイチちゃんは普通系のカッコいい」

「だれが普通系じゃ!!」

と、まあ普通の高校生らしい会話をしていると担任の先生が登場。

伊藤 五郎 通称 ゴロさん。

優しい歴史の先生である。

「、一条、お前、天王寺に告られたらしいな」

「なんで先生まで知ってんすか!!」

「天王寺は先生からの期待も大きいからな。噂はすぐに広まる」

「く……………先生なら止めるべきでしょ!!」

「先生はこういう事大好きです」

「この人、先生じゃねえええ!!」

と、まあ簡単にあっけなくもHRは終わり

1時間目、2時間目、3時間目は流れるように授業が終わっていき

気が付いたら昼休みに

なっていた。

「そついえばイチちゃん。昼休みに生徒会長に呼ばれてるとちゃっう？」

「……何で知ってんだよ」

「情報屋ですから」

「……ッ。でも、別に強制ではないからな。行かなくてもいいだろ
う」

「行けよ!!! 変わるなら俺が行きたいよお……………」

「神山が復活した!!!」

「席に着いてから、ずっと伏せてたもんな。あれか、カミちゃんは生徒会等の事が好きだったんとちゃっう？」

「好きだったよ!!! と、いうよりこの学園に来た理由がそれだよ!!!」

「うわー志望動機不純だ……………」

「不良系カッコいいのカミちゃんと言つと面白さ倍増やな」

「言つなよ。絶対他の人に言つなよ」

「それは無理だと思う」

「なんでだよ？」

「だって、こいつがいるから」

「……うちが広めたるさかい、ありがたいと思いで」
「うわ
ん!!!」

神山は泣きながら教室を出て行った。

俺は凍空と顔を見合わせると『はあ』と息を漏らした。

その時、お昼の放送で良く使われるあれが流れた。

ぴ ん ぽ ん ぱ ん ぽ ん

「え？ いいではないか。少しくらい、あ…あ。ごきげんよう生徒の諸君。生徒会長の

天王寺 遥だ。えっと……何て言ったかな……。そうだ！！—
一条 志希くん。一条 志希くん。至急、生徒会室まで来なさい！
！ 30秒以内に来なければ直接私が1-1組に向いてやろう
では、30秒後お待ちしているぞ！！」

ぴ ん ぽ ん ぱ ん ぽ ん

………。

クラス中の沈黙。

みんながみんな俺を見てくる。

俺は息をゆつくりとはいて、教室を出て行った。

第1話 高校1年の春（後書き）

どうでしたか？

今回は生徒会役員達との対面です。

第2話 生徒会の紹介

昼休み

生徒会長の天王寺 遙に呼び出され渋々生徒会室へと向かう。
それにしても……

「この校舎広すぎてわけわからんわっ!!」

どうにも迷ったようだ。

あたりには人っ子一人いない。

どうしよう……このまま遭難とかなっちゃうかも……。

そして走り回る事数十分

ようやく『生徒会室』というプレートが書かれた部屋を見つける。

「はあ……はあ……やっとついた」

ここか……と、声を漏らしながらドアを開けると俺は目を見開いて
驚いた。

教室の約2倍の部屋。

大きなソファに『会長』『副会長』……と書かれている部屋。

驚きを隠せずしばらく立ち止まっていると、視界に手が入ってきた
ので我を戻す。

「やっと来たか。マイダーリン、あいたかった　ぐへっ!!」

「だから、俺はマイダーリンではないっ!!」

「いたいなあ……つれないじゃないか。スキンシップだよ、スキン

シッブ」

「嘘付け！！ 思いつきり抱きついて来ようとしてたじゃねえか！！」

「まあ、冗談はさて置き」

「どこら辺が冗談なんだああ！！」

俺は広い生徒会室に大きな叫び声を起こすと、『副会長』と『書記』の部屋から

2人の人物がゆっくりと戸を開けて大広間に集まってきた。

「この人は……はっ！！ アナタはまさか！！」

「誰？ この薄っぺらそうな人は？」

「聞いて驚け、見て驚け！！ こいつが今朝言っていた。新しい生徒会メンバーの一条 志希だ」

「待つてくださって！！ 俺まだ入るなんて1言も」

「やっぱりそうです！！ アナタは知弦さんの弟さんの志希くん！！」

俺の名前と姉の名前を呼んだ『副会長』は瞬時に俺の手を握ってきた。

アッシュブロンドの髪に琥珀色の瞳をした、見た感じお嬢様。

その人は『花園^{はなぞの} 冬華^{とうか}』と名乗った。

（花園 冬華……知らないな。）

「私は中学時代に知弦さんに大変お世話になった人でして、その時によく志希くんの話を

してくださっていたんですよ！！」

キラキラと光る瞳は純粹な瞳をしていた。

俺は手を振り払うと、今度は肩を掴まれた。

「い、言っときますけど俺と仲良くしたからって姉と仲良くできるとかそんな風に思っても無駄ですからね。俺と姉は犬猿の仲ですから、無駄ですよ?」

「そ、そんなことはないです。いつも会ったたびに志希くんの話をしてらっしゃったので段々、あなたに惹かれていつてしまいました……」

「はぁ……」

「私のことは冬華とおよびください。私も志希くんと呼ばせてもらいますので」

「……わかりました」

凄いきよいで掴みかかってきた手をようやく放した冬華先輩は胸を降ろすと俺の元を離れて行った。
よかった……助かった。

「たいしか、お前の姉さんは中学時代に伝説の生徒会長とか呼ばれてたんだろ?」

「ええ、生徒からの支持率100% 考えた議題は100%通り、なにもかも無茶苦茶な姉でしたけどね」

「うむ……参考にしたいものだ」

するな!! 参考に!!

そんなことを生徒会長に言つと『書記』のドアから顔を出している人と目が合った。

すると彼女は『こつち見んじゃねえよ』と言わんばかりのガンを飛ばしてくる。

「ん? どうした……あぁ。千夏か? あいつは気にするな少し男

性に免疫がねえだけだ」

「いや、俺経った今までガン飛ばされてたんですけど?」

「こつち見ないでください。けがれてしまいます」

「けがれるかっ!! 見たくらいでけがれてたまるかっ!!」

「腐ります ! 腐り果ててしまいます ! !」

「そのまま腐ってまえ!!」

「まあ、口は悪いが基本的にいい奴だ」

会長は胸を張って行った。

いや、あんたが胸を張る所じゃねえよ!!

それに今の発言はほこっていい所じゃねえええ!!

桜澤 千夏

彼女はそう言うと『書記』と書いてある部屋へ入ってしまった。

会長は俺に歩み寄ると、胸を押し当ててくる。

「どうだ? 私と冬華と千夏……この生徒会メンバーをお前の物にできるぞ?」

「いや、したくありませんってか。あんたが俺に告ったせいで今大変なんですから!!」

「そうか? 私はこれ以上ないくらいに面白がっているぞ」

「それはアンタだけだ!!」

それにしても案の定会長の胸はお……げぶんげぶん。いかん、いかに。会長の毒牙に

巻き込まれるところだった。

俺は絶対に生徒会になんて入りはしない!!

「入りません!! 絶対に!!」

「何故だ！？　そうか……なら、生徒会長の席を譲ろう。それならどうだ？」

「もつと嫌です！と、いうよりなんで俺が生徒会に入る前提で話が進んでいるんですか！」

「いや、私の役職を知ってるだろ？」

「へ？　たしか、この学園のトップですよ？　生徒の中で」

「そうだ。だが、この学園は少し変わっててな。毎年、『会長』

『副会長』は選挙で決める。しかし、その他の役職『書記』『会計』

『庶務』そして……いや、これはいいか。

まあ、この役職については4月の終わりにある『トライアウト役員選抜戦』というものをして、

優勝した者が役員になるという決まりになっているんだよ」

うわ。

俺、やな学園に入学したなあ……。

「え？　でも、俺　参加なんてしないんですけど……」

「大丈夫！！　私が事前に登録しておいたから！！」

「すんなや！！　登録すんなや！！」

俺はようやく会長を振り払う事に成功した。

と、いうより会長が自ら離れて行った。

「別に君に強制しているわけではない。別になりたくなければ、途中で負ければいいだけさ。ただし……私はどっちにしろ君を諦めるつもりはないよ」

にやっと微笑む会長。

俺は思った。

この人……超ずれてる!!

昼休みも終わりということと今日の所は終わりと言われた俺は、教室へ戻って行った。

それにしても……天王寺 遥会長。

あの人は俺みたいない普通の人はどこか違う。そんな気がしてならなかった。

「はぁ……疲れた」

そう言い、教室のドアを開けると、何人も人が大量に押し流されてきた。

俺は無意識にそいつらを避けた。

「あだだ……」

「い、いたい」

「あ、悪い」

俺は廊下になだれ込むクラスメイトを避けて、自分の席へ座る。すると、後ろの席の凍空は目をキラキラを輝かせながら紙とペンを持って聞いてくる。

「で？ 結局どうなったん。イチちゃん」

「あ？ どうもこうもねえって……。なんか、流れで選抜戦に出るとか言われたしよあ」

「ほお……選抜戦ですか？」

「なんだ。お前知ってるのか？」

「知ってるもなにも、この学園の4大行事ですよんか」

「いや、『ですよんか！』って言われても、俺初めて知つたし」

「そうなんや。泉ヶ丘学園4大行事 その先頭を飾るのが『役員選抜戦』 これを決めんとなんも始まんからな」

「そうかよ……」

「で、結局 イチちゃんは参加するん？」

「参加はするよ……と、いうより強制だな。まあ、適当に流して別の人に変わってもらおうよ」

「その言葉。待っていたぞ！！」

少し騒がしい教室に響き渡る声。

その声の方を向けると、神山がいた。

「あ、復活したんだ」

「カミヤん。めっちゃ急いでたでえ、ウチが教えたんよ」

「このチャンスを逃すわけにはいかん！！ 俺は生徒会に入る！！」

「あ、頑張ってください」

「その為に！！ お前を潰す」

そういつて神山は俺を指差す。

俺は呆れると

「別に俺はやる気なんてねえから。1回戦で負けてやるよ」

「それでは勝負にならない！！ 男と男の勝負だ！！」

「これは、これは……いい記事が書けそうな気がしてきたでえ」

おい、何故そこで鼻血をだす。

はあ……どうやら、俺の周りには可笑しな奴らしかいないようだ。

『トライアウト 役員選抜戦』まで、残り1週間。

第2話 生徒会の紹介（後書き）

今回は生徒会視点の話を少々。

それにしても、役員選抜戦トライアウトどうやって話を書こうか……

誤字、脱字、指摘、感想等ありましたら気軽にお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1651z/>

生徒会庶務の俺が送る日常

2011年12月8日01時01分発行